

岐阜県・(公社)岐阜県理学療法士会 主催 小児・障がい児(者)リハビリテーション専門研修 レポート

令和2年2月8日(土)・9日(日)、岐阜県総合医療センターにて、群馬パース大学の中徹先生を講師に、「小児理学療法における背景因子の評価とアプローチ」の研修会が行われました。参加者は46名(スタッフ含む)でした。理学療法士以外にも作業療法士の方も参加されていました。この講習会は毎年1回、全5回シリーズで行われており、今回は4回目となりました。

1日目は、今後の小児理学療法の傾向や最近の話題、前回までの復習を中心に講義して頂きました。

一つ目に、世界理学療法連盟から、客観的变化から主観的变化を重視していく傾向となっていること。主観的とは、患者様がどれくらい幸せ、満足に感じているのかであり、患者様の満足度を評価していくことが重要となってくるそうです。二つ目に、肢体不自由児・身体障害児が減っていく一方で、発達障害児は減ることがない為、発達障害児が増えていくこと。発達障害児は学校に95.8%いると言われており、そのうち特別支援級に1/3 その他は普通級に在籍しているとのことでした。その為、学校の先生とも連携をとり、理学療法士としてアプローチ方法を提案していくことや、作業療法だけでなく理学療法も発達障害児に対して筋緊張や感覚へのアプローチも必要になってくることが予測されるそうです。

2日目は、リハビリテーション医学会でも推奨されている評価「GAS」を用いてゴール設定の方法やスコアの付け方など、一つずつ丁寧に講義して頂きました。ゴール設定では、スマート理論を使い、期限を決定すること、両親や本人とも話し合い決定していくことで、患者様の満足度の評価にもつながることを教えて頂きました。



実技では、立ち上がり運動でのP C I(心肺機能を評価するもの)を実際使用し評価しました。その他、筋肉のストレッチを行い、筋肉の状態変化を実際に感じられる実技体験を行いました。

いずれも、臨床現場ですぐにでも活用できる内容でした。次回は最終回の5回目となり、症例検討形式で行う予定です。前回までの復習も行って頂ける為、初めての方でも参加しやすいと思います。今までの講義を踏まえてICFに基づいた評価やアプローチ方法などを実際の症例に合わせて考えていけるとよいのではないのでしょうか。